

氏 名 小泉 京美

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 238 号

学位授与の日付 平成27年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満州における日本語
文学の研究

論文審査委員 主 査 教授 谷川 恵一
准教授 青田 寿美
教授 劉 建輝
教授 宮崎 真素美 愛知県立大学
教授 和田 博文 東洋大学

論文内容の要旨

本研究の目的は、一九二〇年代から三〇年代における前衛詩運動と満洲における日本語文学の結び付きを、大連で興った短詩運動を媒介に検討することである。

日本の前衛詩運動は美術など他の芸術ジャンルと連動しつつ、総合的な芸術運動として展開したが、その展開はこれまでヨーロッパにおけるアヴァンギャルド芸術運動の移入や受容という側面から捉えられる傾向にあった。だが、日本のアヴァンギャルド芸術運動が、実践的に波及力の圏域を拡大していく直接の契機は関東大震災にあり、さらにその後の植民地膨張という政治的与件に規定されている。本研究では、日本に固有の文脈において前衛詩運動を捉え直すことで、その表現の本質的な解明を目指した。

日本の近代詩が直面していた歴史的課題について考える際に、一九世紀末から二〇世紀初頭に出現する東アジアの植民地（租借地）という場は、看過することのできない重要な問題を孕んでいる。これまでの前衛詩運動の研究においては、『亜』（一九二四年十一月創刊）の短詩運動は『赤と黒』（一九二三年一月創刊）を始めとする関東大震災前後の日本の前衛詩運動の流れを汲み、『詩と詩論』（一九二八年九月創刊）を中心とする新詩運動の前史として捉えられてきた。

しかし、『亜』の短詩運動が、日本の租借地であった中国の都市、大連で興ったことを重視するならば、世界同時多発的に興ったアヴァンギャルド芸術運動の波が、地理的環境を越えて日本に及び、さらに日本の地方都市や「外地」の都市にも及んだという影響関係のみでは捉えることのできない側面が見えてくる。その一つは、日本の近代詩が伝統的な韻文の形式や発想から脱却する際に、植民地という両義的な場を必要としたというジャンルの成立をめぐる本質的な与件の問題であり、もう一つは「内地」の前衛詩運動の文脈を離れ、独自の展開を遂げた「外地」の文学的営為をどのように日本近代文学史の中で捉えるかという問題である。

このような問題意識に立ち、本研究では前衛詩運動の歴史的経緯に留意しつつ、「内地」との影響関係に限定されない『亜』の独自性を、日本と満洲の地政学的関係に目を向けることで検討した。その上で、『亜』の短詩に形象化されている安定した言語形式の揺らぎを、植民地の風景と日本語や日本文学の形式との葛藤という観点から考察した。

関東大震災以後の日本の前衛詩運動は、政治からの自律を標榜して芸術性を追究する動きと、革命のための芸術を旗印に政治的に先鋭化していく動きが交錯しながら展開する。弾圧や転向を体験した前衛詩運動の担い手の幾人かは一九三〇年代に満洲へ渡った。満洲事変から日中戦争に至る過程で、満洲では「五族協和」や「王道楽土」の理念を掲げた「満洲国」に、新しい理想的世界の実現を夢想するロマン主義的な文学運動が勃興する。同時に『亜』の短詩運動が依拠した満洲（大連）という場の独自性は、『亜』の終刊後も満洲の日本語文学の底流に潜在し続けていた。このような多元的な文化状況と地政学的な文化戦略を読み解きながら、日本近代文学における満洲という場の独自性を検証した。以下、各論の概略を述べる。

第一部では一九一〇年代後半から二〇年代にかけての詩と美術の相互交渉に光をあて、詩と美術の協働や葛藤について論じた。既存の芸術ジャンルを越境して総合的に展開したアヴァンギャルド芸術運動の歴史的経緯を明らかにすることと、洋画や俳画の影響を受け、詩の純粋化の過程で逆説的にも絵画表現へと接近した『亜』の短詩運動との連続性を考えるためである。また、一九二〇年代の前衛詩運動を、ヨーロッパの芸術思潮の移入や受容

(別紙様式 2)

としてではなく、関東大震災という固有の文脈から検討することで、その表現の特徴を明らかにした。

第二部では短詩運動と植民地の想像力との結び付きについて論じた。まず、短歌・俳句・川柳などの文脈から展開した短詩運動の歴史的経緯を整理し、『亜』の短詩運動が伝統的な形式との葛藤や交渉を通じて成熟したことを明らかにした。また、『亜』の短詩運動を、その土壌となった大連という都市空間との関わりから検討し、文化的背景や社会情勢などの側面からその独自性の考察を行った。

第三部では満洲の日本人と「故郷喪失」について論じた。満洲事変から日中戦争へ移行する時期に、満洲で活発化していた「故郷喪失」と「満洲文学」または「建国文学」をめぐる問題系について述べ、満洲における日本語文学の展開を明らかにした。さらに、「満洲国」における日本語表現が統治形態や文化政策に規定されながらどのように展開し、満洲と日本の地政学的関係が、どのような文化戦略や摩擦を生み出したのかを検討した。

第一部で考察した関東大震災前後の詩と美術というジャンル間の越境と、第二部で検討した日本と満洲という地政学的な越境を接続することで、アヴァンギャルド芸術運動の本質、すなわち安定した言語形式からの脱却への意志を析出した。それを受けて、第三部では一九三〇年代から四〇年代の満洲において、「建国文学」（文学の安定した形式の希求）とアヴァンギャルド芸術運動（安定した言語形式の変革）が、それぞれ相反する方向性を志向しながら、しかし同じ「故郷喪失」という状況に帰結したことを明らかにした。

以上、本研究は三部構成で、一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満洲における日本語文学の展開を明らかにするものである。

博士論文の審査結果の要旨

本論文「一九二〇年代から三〇年代の前衛詩運動と満洲における日本語文学の研究」は、一九二〇年代から一九三〇年代にかけての短詩運動を中心とする前衛詩の展開を縦軸とし、大連を中心とする「満洲」の空間を横軸としながら、「外地」の日本語文学の世界を明らかにしている。全体の構成は、第一部「詩と美術の越境」、第二部「短詩運動と植民地の想像力」、第三部「満洲の日本人と故郷喪失」の三部構成で、序章「アヴァンギャルドの地政学」と終章「満洲の日本人と言語表現」が、それを挟む形になっている。

同人誌を中心とする一九二〇年代から一九三〇年代にかけての詩誌は、近年の『コレクション・都市モダニズム詩誌』全三〇巻の刊行によって、その全体像が初めて研究者に共有されるようになった。申請者はこのシリーズの第一巻『短詩運動』および第十八巻『美術と詩Ⅰ』の編集を担当し、大連で刊行され短詩運動を主導した『亜』や、美術との本質的な交渉が繰り広げられた『君と僕』『造型』『アルト』『瑯玕』などの雑誌についての研究をまとめており、それを基礎として本論文が構想されているのだが、申請者はさらに、『炬火』『高原』『エポック』など、これまで全体像が明らかにされてこなかった詩誌を見出し、そこから得られた知見を駆使して本論文をまとめている。文献調査に裏打ちされた前衛詩に対する幅広い視野の下に、詩と美術の交渉をつぶさに論じていることが本論文全体の特徴である。

申請者の研究は、一九三〇年代に小林秀雄や萩原朔太郎によって提出された「故郷を失った文学」（小林『様々なる意匠』一九三四年）「漂泊者の文学」（萩原『無からの抗争』一九三七年）というテーマを、日本の現代文学を貫いている基調として捉え直すことによって、関東大震災以降の詩をめぐる動向と、それを主導した植民地「満洲」における文学の展開を、多くの資料を発掘することを通して総合的に分析したものである。社会との情意的な紐帯を絶ち切られた都市生活者がその生活感情の空隙を埋めるために鬻物大衆小説を読んでいるとする小林秀雄や、急激な西洋化によって「心の家郷」を喪失するに至った「漂泊者の悲哀」を描いた永井荷風『墨東綺譚』のモチーフはすべての日本人によって共有されているとする萩原朔太郎等の言説は、申請者が論じた詩の前衛や植民地の文学に直接触れたものではない。これらの言説から取り出された故郷喪失という視点に拠って一九三〇年代のいわゆる文芸復興期を中心とした文学を捉えようとする試みはすでに行われているが、これらに対し、日本のモダニズムの言語に関する中心的な問題系として故郷喪失を位置付け直し、既成の表象秩序に対する批判を敢行した未来主義やダダ以降の日本の前衛詩運動の展開とそれを押し進めた詩人たちが活動の場とした「満洲」における日本語文学のアイデンティティーをめぐる問題とを包括的に捉える視点を提出したところに申請者の研究のオリジナリティーがある。

以下、各部における申請者の研究とその達成について具体的に述べる。

第一部「詩と美術の越境」では、前衛詩各流派（未来派・ダダイズム・アナキズム・意識的構成主義・表現主義など）を横断しながら、詩と美術という異なったジャンル間での相互交渉の様相を取り上げている。創作版画の登場を契機として始まる美術と詩との相互越境が、さまざまな日常の素材をコラージュして詩を可視化するコンストラクションや、印刷技法の斬新な応用による萩原恭次郎『死刑宣告』（一九二五年）を生み出して行った過程を、南天堂に集った若い詩人や美術家たちのネットワークの分析を交えて、既成の表象秩序の破壊を目指す総合芸術の創出という観点から捉えている。中でも『死刑宣告』を主

(別紙様式 3)

な対象とする第四章「関東大震災とアヴァンギャルド」においては、前衛詩が志向する既成の詩の破壊と、関東大震災が都市の文化に与えた即物的な打撃との関連を具体的に解明するすぐれた成果を挙げている。『死刑宣告』が、大小の活字を駆使したタイポグラフィーや無機質なリノカットの版面を挿入したことによって強く視角に訴えるものであることはこれまでも指摘されてきており、また、それが2年前に起きた関東大震災をコンテクストとしていることについても先行研究が存在するが、申請者は、こうした先行研究を総合し、新たな研究を切り拓くことに成功している。すなわち、印刷所の被災による活字不足によって生じた新聞紙面の混乱を検証するとともに、リノカットの素材となるリノリウムが復興へむけて動き出した都市に出現した新しい建築材料であったことを突きとめ、それらを意識的に取り入れた『死刑宣告』が、関東大震災が出現させた詩や美術の物質性を前景化し、意味作用を宙づりにする試みであったことを明らかにした。このことにより、申請者は、前衛詩の実験が、単にヨーロッパから移入された芸術思想の影響下に行われた二次的な運動ではなく、1920年代の日本の現実から必然的に導かれる運動だったことを立証した。丁寧な資料探索による発見と、それらによって豊かな詩集の意味を明らかにしていく手法は、申請者の力量が存分に発揮されたところと評価できる。

第二部「短詩運動と植民地の想像力」は、従来の短詩運動の研究レベルを踏まえながら、それを新しい地平に導いている。短詩運動が詩のジャンルだけではなく、短歌・俳句のジャンルでも行われていたことは、従来の研究が指摘しているが、その際に、分析対象にされてきたのは、『槩』や『我等の詩』という自由律短歌・自由律俳句の歌人・俳人の雑誌であり、彼等のアンソロジー『第一短詩集』だった。しかし第一章「詩・短歌・俳句の交差点」で短詩運動を俯瞰することを試みた申請者は、新たに『国詩』という雑誌や、『一安短詩集』という詩集に収録された短詩論を掘り起こすことによって、詩と短歌・俳句が交錯したところに生まれた短詩運動の全体の流れをより明確に跡付けることに成功している。これまでの研究において一括りに扱われてきた短詩について、短歌・俳句の流れから登場するものが民衆芸術を志向したのに対し、詩のジャンルにおける短詩が民衆芸術からの脱却をはかったところに成立しており、両者は性格を異にした運動であったとの結論は新見である。

第二章「植民地空間のポエジー」および第三章「『亜』の風景」では、大連という植民都市と『亜』の短詩との関連について論じ、新たな知見を提示している。安西冬衛や北川冬彦らによって大連において創刊された『亜』が、極度にことばを切り詰め純粋な詩を目指した短詩によって特徴づけられることはこれまでも指摘されてきたが、その抽象度の高い詩の姿が、パリを摸して造られた大連という植民都市の地政学的条件と結びついていることを、『亜』の同人であった滝口武士の詩と大連の都市景観のありようとの関連を具体的に分析し、『亜』によって試みられた言語実験のコンテクストを明らかにしたことは、『亜』のみならず日本現代詩の始発期の研究を大きく前進させるものである。

第四章「『亜』から『蝸牛』への変容」は、大連図書館の調査により申請者が見出した詩誌『蝸牛』に拠りながら、滝口武士の植民地表象が『亜』における幻想的な明るい都市のイメージから中国人の歴史と生活を沈めた暗い自然の断片へと転換し漂流していくことを初めて明らかにしており、植民地のリアリティに遭遇した前衛詩の問題を本格的に追究した研究として高く評価される。

第三部「満洲の日本人と故郷喪失」も大連を中心とする「満洲」の調査に支えられていることは変わらない。ただ第一部・第二部と異なるのは、詩だけでなく小説も対象にして

(別紙様式 3)

いることである。これまで正面から取り上げられることの少なかった『満洲日日新聞』に掲げられた秋原勝二の小説に光を当て、「内地」からも「満洲」からも等しく疎外されているという秋原らの自己認識を抽出し、「満洲」に新たな郷土を見いだそうとして空転していった「満洲文学」の展開の中でのその軌跡を明らかにしたのが、第一章「〈故郷／異郷〉としての日本」である。続く第二章「まなざしの地政学」では、大連で結成された「満洲アヴァンギャルド芸術家クラブ」の中心メンバーだった三好弘光らの言説を取り上げ、「満洲アヴァンギャルド芸術家クラブ」の運動が、『亜』が提起した問題を継承し、言葉と風景との関係が切断されアイデンティティーの不安定な「外地」という「故郷喪失」の環境に文学的営為の積極的な価値を置くことで「満洲文学」の対抗軸を築こうとした試みであったことを明らかにしている。申請者のこの研究は、「内地」の運動だけを自明の前提のように対象としてきた従来の日本のシュールレアリスム研究に、異なった文化風土の「外地」で、「内地」とは違う新たな表現が切り拓かれていった可能性を示す試みとして高く評価される。この二章に、日本人のまなざしで「満洲」の風土に秩序を与えようとして失敗した金丸精哉の『満洲雑暦』（1939年）と『満洲歳時記』（1943年）とを中心に論じた第三章「故郷喪失の季節」が続くことで、「満洲」における日本語文学の動向を独自の広い視野から捉え直し、今後の研究の基礎を築いている。補論「満洲国」の白系ロシア人表象」で明らかにされた、コザック村での生活から文学を生み出そうとした長谷川濬と白系ロシア人の視点から「満洲」の山野を描いたバイコフをめぐる問題は、今後「満洲」表象をめぐる国際的に取り組むべき課題を提起するものである。

以上のような成果をあげている申請者の研究は、埋もれた詩誌の発掘を含む同時代の多彩な文献資料を渉猟することによって遂行されており、多くの資料を読み込み、それらを相互に関連させながら、わかりやすい筆致で論述してゆく申請者の力量は高い。また、全編を通じ、多彩な雑誌に結集していった詩人や芸術家の動向の丹念な追跡の上に為された研究であることも特筆に値する。

このように、意欲的ですがぐれた成果をあげている申請者の研究であるが、学術誌や単行本に発表された論文に基づいていることに起因する、論旨の重複や同一資料の引用が推敲されずにそのまま残存しているという問題が存在する。また、先行研究との関連が必ずしも明確でない論述も一部見受けられる。しかし、こうした瑕疵があるとしても、浩瀚な知識と資料の博搜に裏付けられた本論文が、日本の前衛詩と「満洲」の日本語文学の両面において、従来の研究に大きな進展をもたらす学術成果として高い水準を達成していることは動かない。

以上により、審査委員会は全員一致で、申請者である小泉氏の研究が博士の学位を授与するに値するものであると評価する。